

夏の企画展「浜口陽三と白倉嘉入展 満ちてくる光」 ギャラリートーク紹介

「白倉嘉入について」 波瀬山 祥子 先生（日本女子大学）

2026 年 5 月 13 日 会場・ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション



波瀬山 祥子 先生

日本女子大学に勤めております波瀬山祥子と申します。2024 年の 4 月 8 日から 5 月 12 日にかけて大阪の枚方市にあります天門美術館で「歿後 50 年記念近代南画界の異才 白倉二峰展」の準備や図録の制作に関わらせていただきました。今日は簡単に白倉嘉入（二峰）の略歴と作品を紹介していきたいと思います。嘉入といたり、二峰と言ったりしていますけれども、嘉入は 1940 年から名乗った号で、それまでは二峰と名乗っていました。

嘉入は明治 29 年（1896）、新潟県新発田市の生まれです。本名を欣一郎と言い、南画家の服部五郎が新潟に滞在していた頃に、南画を学びます。その後大正元年（1912）に、中学を中退して上京し、大下藤次郎のみづゑ研究所に通い、石井柏亭にも水彩画を学びます。またその後南画をやりたくなくて、服部五郎を追って京都へ定住します。服部五郎没後は、田近竹邨という人について絵を学ぶようになります。その後、日本南画院にも加わって、そこで南画家の小室翠雲という人とも出会っております。

二峰の“二峰らしさ“が出てくるのが、だいたい大正 8 年頃かなというふうに思います。大正 8 年から 10 年（1919～21）頃は、縦長の構図でゴツゴツとした山肌を点描でたくさん重ねて表現するという作品を多く手がけております。

これは今展示されている作品。後でじっくり見ていただきたいんですけども、青とか緑とか、薄い黄色を重ねて山を表現しております。右下寄りに三角形の屋根で赤い壁の建物がございます。これはおそらく、中国の風景をイメージして描いたものではないかと思われます。

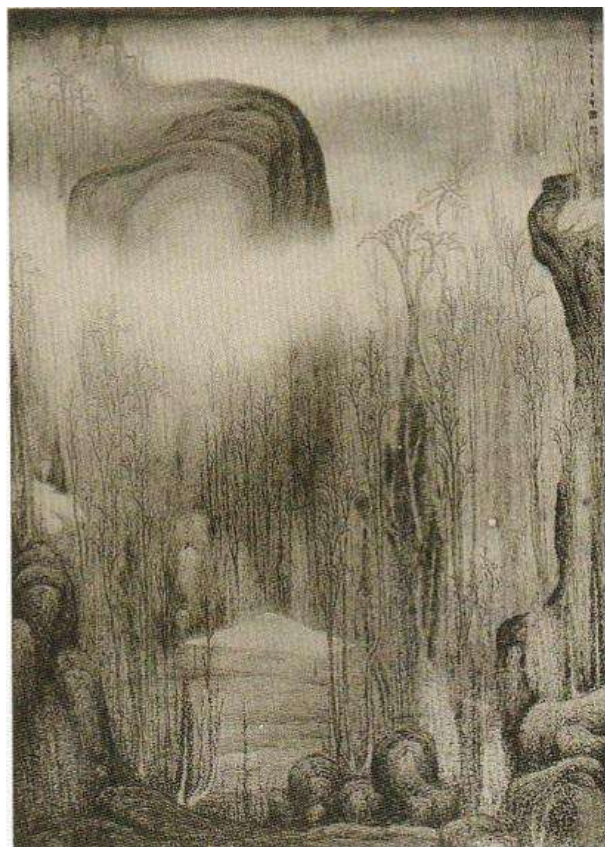


《夏雨新霽図》1921 年 絹本着色 40.6×42.2 cm 撮影 Tomas Svab

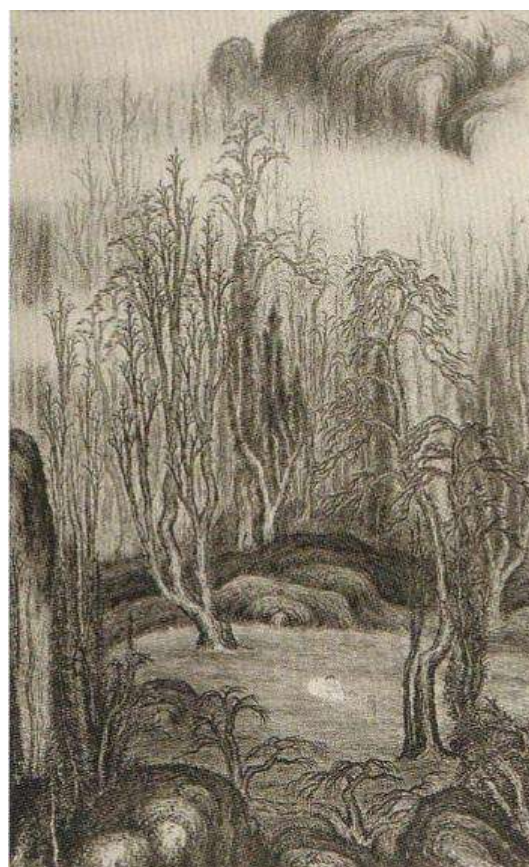
実は二峰は、大正 10 年から 12 年にかけて中国旅行に出ています。その時に現地で見た風景を作品に描いて、帝展にも出品しております。これらは実物の作品が残っておりませんで、モノクロになってしまうんですけども、南京市の柳楊邨、浙江省を流れる川、そういった中国の題材を描いております。この頃になると、大正 8 から 9 年頃に見られたゴツゴツとした表現に、少し柔らかさが加わり、湿潤な空気感や光の表現が作品の中に取り入れられるようになってきたように思います。

二峰時代の作品は、点描を数多く重ねて表現する画風と考えていただければよいと思います。

しかし次第に、実際に見た中国の風景から、さらに想像力を膨らませた幻想的な風景を描くようになります。それが昭和初期の作品で、昭和3年(1928)の帝展出品作《林亭》や、同じく昭和4年(1929)の帝展出品作《間寂》などがあります。これらは、どこか特定の場所を描いたというよりは、二峰自身が中国のイメージを膨らませ、理想的な世界を表現したものではないかと思います。



《林亭》



《間寂》

図録『歿後 50 年記念近代南画界の異才 白倉二峰展』より

こちらは現在展示している《深林暮色図》です。道が白く抜かれており、そこが道であることが分かるようになっています。その先には白い服を着た人物がいて、遠くを眺めているという構成です。赤や黄色も葉の色として取り入れられ、色鮮やかな秋の風景が表現されています。上に漢詩が書かれています。二峰 は、自分で詩は詠まないんです。有名な中国の古典の詩をここに付すという感じです。



《深林暮色图》 制作年不明 紙本着色 149.3×45.8 cm 撮影 Tomas Svab 右は部分

今回展示していない作品ですが、二峰には少し変わった作品もあります。こちらは《龍図》。二峰の作品の中でもひととき濃い墨を使って龍を描いております。こちらは《旭日図》と言って、不思議な形をした太湖石の後ろに痩せ細った松が生え、その上に真っ赤な太陽が描かれています。この太湖石を拡大して見ると、金を使って岩肌のゴツゴツとした質感、いわゆるマチエールを表現しています。どこか黒い人が立っているようにも見える、不思議な雰囲気作品です。このような変わった表現の作品も残されています。



《龍図》 絹本墨画 130.7×36.4 cm 《旭日図》 絹本着色 132.8×34.5 cm

ともに図録『歿後 50 年記念近代南画界の異才 白倉二峰展』より

「躍進する二峰」ということで、二峰の作品を続けてみていきたいと思います。二峰時代、たくさん描いたモチーフの中に樹木があるんですけども、例えばこれは昭和 3 年（1928）に日本南画院に出した《老梅図》、昭和 6 年《墨梅図》、昭和 8 年の《歳寒三友図》などは、いずれも樹木を主題にしています。《歳寒三友図》は 六曲一双の屏風で、ここの黒く見えるところが樹木、白が雪の表現で、白と黒のコントラストを効かせています。樹木が下からも生えているし、上からも生えている。樹木をコンポジション的に配置しています。これは小室翠雲に言

わせると「奇才縦横、その大胆な構図など、まさに南画の(狩野)山楽である」と評価しております。私は、さらにその山楽を引き継いだ狩野山雪の作品に近いと思います。二峰は京都にいましたので、山雪の作品を目にすることができたのだと思います。この時期に古い日本の美術作品に影響を受けたんじゃないかと思っています。



日本南画院での活躍についてお話ししたいと思います。日本南画院とは、南画による近代絵画の創出を目指して、大正 10 年（1921）に水田竹圃、河野秋邨、三井飯山を發起人として結成された一つの団体です。全 15 回の展覧会と同人らによるテーマ展を開催し、南画による近代絵画の創出を目指しました。最初は、反帝展の性格を帯びていたんですけども、帝展の審査員を務める小室翠雲が加わったことで、竹圃ら帝展出品者も同人に挙げられ、全国規模となっていく団体です。二峰は官展と言われる文展、帝展に出品する一方で、反帝展的な様相を帯びている日本南画院にもたくさんの作品を出品しております。

次に、二峰から嘉入に変化していく過程を見ていきたいと思います。こちらの 2 作品《深山幽谷図》と《黒部峡図》は、今展示されている作品です。二峰時代から嘉入にかけて次第に点描が少なくなり、画面に余白が生まれてきます。署名の字体とか、墨の濃さもだいぶ変わっています。それまでの濃く力強い書風から、より繊細で柔らかな表現へと変化しています。



《黒部峡図》 制作年不明 絹本着色 131.7×28.1 cm 撮影 Tomas Svab

神崎憲一の雑誌記事では「突如として弱々しいまでに簡素瀟洒な筆致に急変した」と言われています。ただこうやって作品を見ていくと、急というより、徐々に徐々に変化していったと考える方自然ではないかと思います。昭和 15 年（1940）に、新宿の伊勢丹で白倉二峰近作個展をやっておりまして、そこに 28 作品が出展されております。この時に出品された作品の詳細は分かっていませんが、展覧会を見た富田啓子の評によりますと「健強であるよりは細繊なその作風」とか「点苔駆使の中に見られる明純感、中間色的な行き方を取った設色」と述べています。これは、まさに今ご覧いただいているような作品を指しているのではないかと思います。

《朝雪図》は、まさに嘉入に改号した時の作品です。昭和 15 年、紀元 2600 年を記念して嘉入に名前を変えております。本名の欣一郎の「欣」と同義の「嘉」（どちらも喜ばしいという意味があります）に、自分の先生の服部五郎の、さらに先生である田能村直入の「入」という字を取って「嘉入」としたのです。署名は「嘉入」となっていますが、印には「白倉二峰」が使われており、改号の過渡期にあることが分かる作品です。実はこの作品は、2 年前の展覧会を開催する際に再発見され、昨年度、新潟県立近代美術館の収蔵になりました。この作品に関しては、展覧会にご協力くださった、同美術館学芸員の長嶋圭哉さんによる詳しいコラムがありますので是非ご覧ください。

<https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/topics/column44/>



《朝雪図》1940 年 絹本着色 203.0×73.0 cm

新潟県立近代美術館所蔵 撮影 Tomas Svab

さて、この作品になると、点描がもうほとんど見られなくなっています。

さらに嘉入に改号した翌年、昭和 16 年（1941）の第 4 回新文展に出品されたのが《細雨流水》で、現在は韓国国立中央博物館に所蔵されております。何故韓国にあるのかというと、韓国の李王朝が 1941 年に購入したのです。2003 年 3 月に大阪大学の後輩と天門美術館の池田先生とともに中央博に調査に行かせていただきました。細部を見ますと、葉っぱの 1 枚 1 枚の輪郭をちゃんと墨の線で囲って、その中に色をつけております。白っぽい緑の葉もあれば、黄色っぽい緑色の葉もあり、ちゃんと種類ごとに描き分けております。さらに点を細かく打って岩肌を表現するという描き方がされております。下部の流水部分を見ると、岩を非常に細かい筆致で描き岩の質感を表現しています。水の流れは墨線で表し、そこに美しい薄い水色を施しています。下の岩は淡い茶色で表現され、水が透き通っている感じが感じられます。上部の木々も全く手を抜くことなく細密に描かれています。しかし少し離れて全体を見ると、細密な描写が決してうるさく感じられず、画面全体として心地よく調和しています。まさに嘉入時代の最高傑作だと思います。



《細雨流水》 1941 年 絹本着色 242.0×70.0 cm
National Museum of Korea (韓国国立中央博物館) Kun143

最後に、今回は浜口陽三が白倉嘉入に墨絵を習ったということで、2 人のコラボレーションの展覧会になっております。浜口陽三が嘉入に習ったのが、昭和 16 年（1941）32 歳の頃です。先ほどご紹介したようにこの前年に《朝雪》という作品を初めて嘉入の号で出品した。その翌年に陽三が学んだ、そういった時系列になります。白倉嘉入からどのような影響を受けたのかは浜口陽三自身は何も言うてはいらっしゃらないんですけども、今回改めて作品を見て、嘉入から日本画を学んだ経験が、その後の浜口陽三の作品のどこかに生きているのではないかと感じました。

予定の時間を少し過ぎてしまいましたが、これでギャラリートークを終わらせていただきます。皆様、ご清聴いただきありがとうございました。



ギャラリートーク会場風景